

翻訳の意味論

城 生 佰 太 郎

The semantics of the translation

JÔO Hakutarô

As for the purpose of this paper, in what point, if trying, a little is to clarify whether or not it is possible to do better translation from the present situation. It clarified three which are shown below as the temporary conclusion.

(1) To be clear, in case of translation the purpose of which is an amusement, the service which had a point of view of the thorough audience is found from the example of the movie "The Horse Soldiers" which was described first.

Therefore, there, the effort to exclude correctness and the idealism which had a point of view of the translator and so on to the utmost will be indispensable.

(2) Are "super translation" which was tried in the Academy Publishing Company and so on not the way of appropriate being excellent, being livelier reviewed in the work, the translation?

(3) Recently, the expressions such as "the multi-lingual alternating current" and "the different culture understanding" increase but it is very difficult to boil to be the limit where the understanding and the recognition to which actual place degree can be looked for and to be therefore quantified.

However, in the form of something, in the future, it confronts the difficult problem and it will should not neglect an effort for the realization of making a rating scale in the partial resemblance.

1. 翻訳の功罪

- (1)a 「あばよ、ヤブ！」
b 「線路工夫！」
- (2)a 「じゃあな！」
b 「石頭！」
- (3)a 「あばよ、イカサマ野郎！」
b 「元気でな、保線手！」

(1)～(3)は、いずれも同一映画の字幕および吹き替えである。オリジナルは、ジョン・フォード監督作品『騎兵隊 The Horse Soldiers』(1959)のはほぼラストに近い1ショットからの引用だが、オリジナルの会話は次のようになっている。ちなみに、aはジョン・ウェイン扮する騎兵隊の隊長、bはウィリアム・ホールデン扮する軍医のせりふである。

a : So long! Croaker.

b : Take care, section hand!

こうして、改めてそれぞれの翻訳を並べてみると、これが本当に同一作品なのかとさえ疑いたくなるくらいである。

原文と照らし合わせれば、(3)がもっとも忠実な置き換えをやっている。そういう意味では、教室レベルだったら高得点が稼げそうな案だといえそうだが、残念ながら筆者には作品の面白みを殺してしまう訳に思える。(2)は、ひところヒステリックにやかましく叫ばれた、「差別語」に配慮した訳出で、オリジナルで言っている「section hand」という、きわめて重要なキーワードが完全に無視されている¹。これでは、「はじめは激しく反目していた二人が、互いに協力して困難に立ち向かわざる

を得ない状況下で、いつしか固い信頼と友情で結ばれてゆく」といった、フォード好みの男と男の生きざまをしめくくる大切なショットのせりふが台無しである。したがって、結論として、筆者としては上記のうちからベストを選べといわれたら、まよわず(1)を選びたい。ただし、お断りしておくが、この選択はあくまでもオリジナルの作品を鑑賞する際の娯楽的効果を考えた場合のことである。

もうひとつ、似たような例を実生活の中から指摘し、翻訳が抱えている問題点を考えてみよう。筆者は無類のカメラ好きだが、あるとき国際的にもきわめて著名なブランドとして通っているドイツのライカを購入したときの実話である。外国製品なので、当然のことだがカメラには取扱説明書の日本語訳が同梱されている。その、日本語訳の次の部分を見て、筆者は愕然とした。いわく、

(4a)カメラをコックしてからキャッチを指で押し上げ…

(5a)シャッターの第1カーテンを閉めてから、第2カーテンを開き…

などなど、である。たしかに、これらの翻訳は先に見た(3)と同様、原文には忠実である。しかし、このような訳文を作られたのでは、私のように小学生のときからカメラ漬けで育った根っからのカメラ好きな人間でさえ、何のことやらサッパリわからない。ここは、次のように「翻訳」するのが正解であった。

(4b)レバーを巻き上げてから、金具を押し上げ…

1 詳述は避けるが、ウェイン扮するマーロウ大尉は入隊前に鉄道に勤めていて、命がけで保線夫をしていた。それを、ホールデン扮する軍医がからかって「section hand!」と言っている部分なのである。したがって、脈絡から考えると、ここに入るべき訳語は(1)～(3)の中では(1)ということになる。

(5b)シャッターの先幕(さきまく)を閉じてから、後幕(あとまく)を開け…

上のような陳腐な翻訳ができてしまった理由は、思うに、訳者がライカなどに触ったこともなく、ただひたすら辞書を片手に机の上で勉強してきた英語好きだったからではないか。つまり、翻訳という作業は、いまさら改めて指摘するまでもなく、単なる直訳一すなわち、機械的な置き換え一だけで済むような内容のものではない、ということである。換言すれば、そのもの、そのことを熟知したうえで、どの表現がもっとも自然で抵抗が少ないかを見極め、しかも原文で述べている趣旨を可能な限り損なわないことが要求されるということの意味する。

2. 究極の翻訳はバスク語をマスターするようなものである

では、翻訳の対象を熟知していさえすれば良いのかというと、それも違う。次の例は、最近日本列島を震撼させた未曾有の大震災に伴って発生した福島原発に関する池上彰氏の解説である。

「福島原発で爆発」—3月13日の朝刊各紙は、1面トップに巨大な活字を使って、こう報じました。

実に衝撃的な出来事でした。「安全」と言われてきた原子力発電所で爆発が起きたのですから、もし私が新聞社で紙面の見出しを考える担当者だったとしても、おそらくこの見出しを掲げただろうと思います。

しかし、この見出しを見て、原爆のような爆発が起きたと勘違いした人も多かったようです。

翌14日夕刊各紙の1面の見出しは、「3号機も水素爆発」。

「水素爆発」という文字を見て、今度は水爆(水素爆弾)が爆発したかのような誤解をする人も現れました。

…中略…

専門家や新聞記者たちは、原子炉が原爆のように爆発することなど原理的にありえないとわかっていますから、「原発で爆発」という見出しを安易につけてしまいますが、知識のない一般の人は、不安をかき立てられてしまうのです。

専門家と一般の人との知識のギャップが不安を呼んでしまう。それが、今回の事故報道の教訓のひとつではないでしょうか。

…中略…

専門家が難解な言葉を使うため、一般の人は理解できずに不安が増幅する。これではいけません。専門用語をわかりやすく“翻訳”することも、新聞やテレビの役割なのです。

(朝日新聞、2011年3月25日朝刊、13版、15ページより一部引用)

筆者も、これらの報道を見聞きしていて、まさに同感であった。つまり、池上氏が指摘しているとおおり、「わかりやすさ」ということがもっとも重要なキーワードであるという認識である。

しかし、この「わかりやすさ」という目標は、決して単純なものではない。ある人は、ある程度の基礎知識を持っている。他の人はまったく基礎知識を持っていない。ある人は比較的ひまで、報道された情報を丹念に見聞きすることができる。しかし、他の人は忙しくて、ほんの短時間しか情報を得ることができない。というように、人それぞれで日々毎日の生活様式が異なるので、いわば「最大公約数」的なわかりやすさをはじき出すことは至難の業である。

有名な言語学的笑い話に、むかしある宣教師が長い年月をかけてついに難解で知られるバスク語の文法書を書き上げた。しかし、彼はその本の表題を『バスク語文典』などとはしなかったという。では、どうしたのか？ 答えは、『我、不可能事に打ち勝てり』であったとか。まさに、究極の翻訳をするということは、このレベルに近いのではないか。

それにもかかわらず、本稿では「このような点に心がけたら、現状より少しはマシな翻訳ができるのではないだろうか?」、というポイントを模索することを目的として、以下に筆者の考えるところを述べる。

3. 翻訳とは

まず、翻訳という作業をどう考えるか。この点から述べる。

そもそも、翻訳とは、ある言語を他の言語に置き換える作業である。ただし、その際に、できる限り母語話者から見て自然でなめらかな、しかもわかりやすい表現が求められる。また、「ある言語」は必ずしも外国語とは限らない。先に2であげた池上彰氏の指摘のように、専門家用語を一般の人が使っている日常語に直す作業も翻訳に含まれると考えるからである。方言を共通語に直したり、あるいはその逆の作業もまたしかりである。

もっと広く捉えれば、ある文化を他の文化に置き換えるということにもなり得るので、ここから単に言語だけの問題ではないことが窺知される。これに関連して、翻訳に当たる訳者の経験(特に、翻訳しようとしている事象に対する理解、知識、体験、など)や言語運用に関するスキル(生硬な訳文を作ってしまうか、それとも多少は正確さを犠牲にしてもこなれた訳文にするのか、など)が問われることになる。

さらに、同じ内容でも表現形態が文字言語であるのか、音声言語であるのかによってそれ相応の工夫が必要になる場合もある。たとえば新

聞・雑誌など文字言語による報道のありかたと、テレビやラジオにおける音声言語による報道のありかたとでは根本的に異なる部分が多々あるにもかかわらず、しばしば、テレビ・ラジオで文字言語を単に読み上げるといった表現方法がとられている点に問題があるということである。これでは、内容以前に形式面における「わかりにくさ」が先行してしまうということにほかならない²。

4. 超訳のすすめ

次に、具体的な翻訳の方法について、特に筆者の目に留まった優れた例を挙げてみよう。それは、「超訳」とよばれるもので、シドニー・シェルダンの訳本を多数出版しているアカデミー出版社による造語である³。

方法は、いたって周到で、(1)まずは第1訳者が原文を直訳する。(2)次に、第2訳者が原文を見ずに(1)の訳文を出来る限り自然でなめらかな日本語に直す。(3)最後に、第3訳者が原文と(2)を照らし合わせて、あまりにも原文とかけ離れてしまった部分を、「こなれた日本語」を損なわない範囲で可能な限り修正して、完成稿とする、という手順である。

結果は、非常に読みやすい日本語となり、これが翻訳による文章なのかと疑いたくなるほどのできばえである。しかし、何にでも反対の意見を持つ人は例外なく存在するもので、こうした「超訳」に対しても、原文の持つ雰囲気や壊されるとか、原文とは異なる意味の訳文などは「翻訳」という名に値しない、などの批判が寄せられている。

² 最近の報道から実例を挙げれば、テレビやラジオで「ヒバク」という語が何度も使われたが、多くの視聴者は「被爆」のことかと思い、驚かされた。このように、漢語には同音異義語が多数存在するので、音声言語による表現の場合にはあらかじめ爆弾を受けるという意味ではなく、浴びるという意味の「被曝」であることを、どこかで説明しておく必要がある。

³ なお、城生恒太郎(1994:190-191)なども参照。

たしかに、純文学作品を学術的見地から研究するような特別な目的を持って作品に接する場合には、多少のぎこちなさを残しても、直訳に近い訳文のほうが歓迎されるということは理解できる。しかし、世の中にはほんの一握りの専門家に対して、天文学的数値の一般人が存在している。そうして、そのような人たちは作品を単なる楽しみ、娯楽として人生に潤いを与えてくれる潤滑油的なものとしてしか受け止めていない。だとしたら、持って回った迂遠な表現の羅列で読者の大脳をいたずらに疲弊させるよりは、だれにでも親しめる読みやすい文章に直すということは、これもまた立派に人類全体の幸福に寄与貢献することになるものと思われる。

5. 対訳：仏・蒙・日による実践

では、次に対訳の実践をとおして見えてくる問題点を、『ボヴァリー夫人』における原文のフランス語と、これに対する訳文であるモンゴル語および日本語を分析資料として論じてみよう⁴。

ところで、なぜモンゴル語を取り上げるかということだが、わが国では英独仏のような歴史のある外国語の場合にはかなり整備された辞書がそろっている。しかし、筆者が大学で専攻したモンゴル語のようなマイナー言語の場合、辞書とは名ばかりのものであって、あまり頼りにはならなかったのである。有名な例では、トルコ語と日本語の対訳辞典における「はね」がある。もとのトルコ語は「kalem」となっている。これは、実は「ペン」の意味なのだが、むかしはトルコ語から直接日本語に置き換えられるようなレベルの辞書がなかったので、とりあえずトルコ

4 2ヶ国語の対訳ならば、サンテグジュペリの『星の王子さま』などが種類が極めて多いので比較考察する際に最適の資料となるが、本稿では一般の人があまり目に触れることのないモンゴル語訳についても視野に入れたかったので、あえて『ボヴァリー夫人』を選んだ。

語とフランス語の対訳辞書を引き、次にフランス語と日本語の対訳辞書を使って解を導いた。この結果、土-仏辞典で「kalem」は「plume」と出ている。次に仏-和辞典で「plume」を引くと、(1)はね、(2)ペン、と出てくる。そこで、機械的に仏-和辞典の第1語義を引き当ててしまったために、本来「ペン」であるべき「kalem」が、「はね」に化けてしまったというわけなのである。

したがって、マイナー言語を視野に入れておくということは、今後のマイナー言語の辞書学にとっても益するところがあるであろうし、またメジャーな言語にとっても思わぬところに意味記述に際しての重要なヒントを見出す可能性があるものと考ええる。

原文は、Gustave Flaubert: *Madame Bovary*, Garnier-flammarion, Paris, 1966を用いている⁵。また、訳文のほうは、モンゴル語がJ.Namsrai(ナムスライ)訳による*Bobari Xatagtai*(ボヴァリ夫人), Ulsiin xebleliin gazar, Ulaanbaatar Ix surguuliin gudamji, 1. Suxbaatariin neremjit xebleliin kombinat, 1970.(国営印刷書、ウランバートル大学通り1、スフバートル出版コンビナート)、日本語が生島遼一訳による新潮文庫(新潮社、1971年)版によっている。また、本稿で用いたモンゴル語は、モンゴル国のモンゴル語(ハルハモンゴル語)なのでキリール系の文字で書かれているが、本稿では印刷の都合上、便宜的にローマ字転写を施してある。

以下、全文を扱うことは紙数の関係上不可能なので、興味ある問題を含む部分のみを抜粋する。小見出しに掲げられた番号は、抜粋した箇所を示している。たとえば、「1-1~3」とあれば、原文の第1ページ、1

⁵ 分析に用いた版の出版年が古いのは、この研究を行ったのが1971年6月から9月にかけての3ヶ月間であったことによる。その後、いろいろな事情で本稿は日の目を見ることがなかったで、今回このような形にまとめることとした。なお、対訳のモンゴル語と日本語の資料も同じ理由によって1970年代の古い版が用いられている。

行目から3行目までという意味である。

5. 1. 原文37-1~3

【原文】

Nous étions à l'étude, quand le Proviseur entra, suivi d'un *nouveau* habillé en bourgeois et d'un garçon de classe qui portait un grand pupitre.

【同、逐語訳】

校長が普段着の「新入生」と、大きな勉強机を抱えた用務員を連れて入ってきたとき、私たちは勉強していた。

【モンゴル語訳】

Xicjeelee dabtaad suuzj baital zaxiral, ger zuuriin xubcastai xüü, xicjeelin tom sjiree örgösön tüssmel xojoriig daguulsaar orzj ireb.

【同、逐語訳】

自分の教科を復習しているときに、校長が平服の子と、教室用の大きな机を持った係りを従えてやってきた。

【日本語訳】

私たちは自習室にいた。すると、校長が制服でない普通服を着た『新入生』と大きな教室机をかついだ小使いをしたがえてはいつてきた。

ここで、まず目につくのは、原文7語めにあるProviseurである。わざわざ、大文字にしてあるのはなぜか？ モンゴル語訳および日本語訳ともに、さらりと「校長」と訳してあり、いずれもこの部分には注目していない。ドイツ語ならいざしらず、フランス語では一般的に普通名詞の頭部を大文字にするということはない。だとすれば、この部分には作者の格別な思い入れがあるはずなのだが、このようにモンゴル語訳と日

本語訳を並べてみると、どうやら翻訳するには適さないようであることが窺知される。

そこで、ここから先は筆者の個人的見解になるが、Provisieurを大文字にした作者の気持ちを、できるだけ斟酌してみたいと思う。この際に、大文字から想起されることの第1は、いわゆる「意味の特殊化」であろう。すなわち、他と区別するというmarkingの機能を持たせているという解釈にはかならない。あえて、実用語学的見地からの表現を用いれば、「半固有名詞的な用法」とでもいうことになるのであろう。

こう考えると、一般的などこにでもいる校長について言っているのではなく、「特定の」「例の」「あの」「みんなの知っている」…校長ということになる。

次に注目すべきポイントは、当然のことだが12語めに見える*nouveau*である。なぜ、当然かと言えば、原文がわざわざイタリック体で書かれているからだ。フランス語のun *nouveau*は、文法的には形容詞の名詞化である。日本語に置き換えれば、まあ「おニュー」とでもいうようなところであろう。だが、モンゴル語訳ではこれを無視して、単に「子」として済ませている。これは、訳者の語学力に起因するものなのか、はたまた別の理由があつてのことなのか筆者には図りかねるが、いずれにしても誤訳であることは間違いない。

これに対し、日本語訳ではわざわざ二重かぎを使って『新入生』としてある点は、さすがである。しかし、その前の部分にある「制服でない普通服を着た」という訳文はいかがなものか。筆者だけの感想かもしれないが、これではどうにもクドい。そこで、次にこの部分について検討してみよう。

原文では、habillé en bourgeoisという部分に相当する箇所である。この、bourgeoisというフランス語は、日本語における外来語として一般

的に用いられている「ブルジョア」とは異なり、bourg(小さな町)に住むつつましい住民のことを意味する。つまり、ここから質素な身なりであることが十分に伝わるような訳語が選ばれなければならないことは言うまでもない。この点で、モンゴル語訳はger zuuriin xubcastaiとしており、逐語訳すれば「家の中で着る服を着て」となる。要するに、普段着ということである。

したがって、生島遼一による「制服でない普通服を着た」という訳文は、たしかに原文には書いてないが、制服ではないということを汲んで作られたものであろうが、いかにもその後に見える「普通服を着た」という部分が受け入れがたい。現代日本語では、「普通服」などという言葉は用いられる機会がほとんどなさそうに思われるからにほかならない。それに第1、これでは「質素な身なり」という原文のニュアンスが十分には伝わらない。

次に、原文のun garçon de classeという部分を検討してみよう。このところは、フランス語学ではやっかいな問題の一つとして知られる冠詞の問題が絡んでいる。つまり、

(a)un garçon de classe

(b)un garçon de la classe

とを比較するとどうなるか、という話しである。すなわち、(a)ではclasseに冠詞が用いられていないが、(b)では冠詞が用いられているという点がポイントである。

ここで、まずは音声情報に注目すると、(a)ではイントネーションのカーブがgarçonの「çon」の部分で頂点として、文頭から「çon」までは徐々に上がり、「çon」からは文末にかけて徐々に下降する。いっ

ぼう、(b)の場合は文頭から「çon」にかけてイントネーションのカーブが徐々に上がるころまでは一緒だが、そのあと顕著な下降をせず、「çon de la」あたりまでがだらだらと高く続いた後で、ようやく文末にかけて徐々に下降する。要するに、(a)よりも(b)のほうがイントネーションのもっとも高くなる頂点を長めに調音するということである。このような音響音声学の特徴は、一般に文法にしか興味を持たない言語学者たちには見過ごされがちな事実だが、聴覚情報処理系の営みにとってはピッチパタンが異なるので、大脳における言語処理における重要なポイントとなる。

次に、文法的に説明すれば、無冠詞となっている(a)のほうが何らかの意味で形態素間の結びつき方が強固であるとされている。したがって、意味の特殊化がおこり、単なる「教室の男」ではなくなるということである。この点で、モンゴル語訳はtüsïmel(官吏、係り)、日本語訳は「小使い」としているの、上に述べた文法上の無冠詞名詞に対する配慮はそれ相応に看取される。しかし、筆者の語感からはいずれも受け入れがたい。やはり、ここは「用務員」ぐらいが穏当なところであろう。

最後に、原文における絶妙な動詞の時制に関する問題を指摘しておく。まず、Nous étions à l'étudeでこの部分は始まっている。ここに用いられているétionsは、êtreという動詞の半過去形である。次に、le Provisieur entraが続く。ここに用いられているentraは、entrerという動詞の単純過去形である。そうして、最後にun garçon de classe qui portaitが見える。ここに用いられているportaitは、porterという動詞の半過去形である。このように、フランス語の原文には

〔半過去〕 = 線状性の描述

〔単純過去〕 = 点的な行為の描述

というそれぞれの役割をになった、2種類の過去時制が用いられている。つまり、冒頭でいきなり登場した「わたしたち」は、すでにこの物語が始まる以前から一定時間継続して「勉強していた」のであった。このような背景が明らかになったところで、そこへ突然に「校長が入ってきた」という出来事が起こったのである。しかも、その校長が従えていた用務員は、これもまた入室する以前から、一定時間継続して大きな机を抱えていたのである。

こうした動詞活用パラダイムの違いは、翻訳の際には大きな障壁となる。案の定、モンゴル語訳ではついに妙案が浮かばなかったもののように、単なる過去時制として捉えたような訳出となってしまった。

この点で、日本語訳には優れた工夫が凝らされている。それは、1文で書かれていた原文をあえて2文に分割し、「私たちは自習室にいた。すると、校長が…(中略)…はいつてきた。」とすることによって、背景(私たちがいたこと)と前景(校長が入ってきたこと)とを巧みに訳出することに成功しているからにほかならない。

5. 2. 原文37-24~29

【原文】

On commença la récitation des leçons. Il les écouta de toutes ses oreilles, attentif comme au sermon, n'osant même croiser les cuisses, ni s'appuyer sur le coude, et, à deux heures, quand la cloche sonna, le maître d'études fut obligé de l'avertir, pour qu'il se mit avec nous dans les rangs.

【同、逐語訳】

教科の暗誦が始まった。彼は、説教を聴くように耳をそばだてて注意深く聞いた。足も組まず、頬杖もつかず。だから、2時に鐘が鳴ったと

き、担当の先生は彼が私たちと一緒に列に並ぶようにと告げなければならなかった。

【モンゴル語訳】

Bagsj bidnees xicjeel asuuzj exleb. Sjine suragcj amjsgaa xuraan, sümiin unsjlagand bui met xölöö cj acjlgüi, sjanaagaa cj tulalgüi bisjüürxen suuna. Xojor cagt conx coxixod angiin bagsj tüüniig duulab. Duudaagüisen bol er xödlöx sjinnzjgüi baisan jum.

【同、逐語訳】

先生は、私たちに教科について質問し始めた。新入生は、息を殺して僧侶の説教であるかのように足も組まず、頬にも寄りかからず、かしこまっていた。2時に鐘が鳴ると、クラスの先生は彼を呼んだ。呼ばなければ、まったく動く様子がなかったからである。

【日本語訳】

学課の暗誦がはじまった。彼は説教でも聞くように、足を組むこともせず、肘もつかず、謹聴というかっこうで聞いた。二時に鐘が鳴ったとき、自習教師がみんなといっしょに列にはいるんだと注意してやらねばならなかった。

ここで、まず目につくのが2文めに出てくる*écouta de toutes ses oreilles*という部分である。逐語訳をすれば、「彼のすべての耳で聞く」となる。もちろん、ここは「全身全霊を傾けて」という意味であろうが、「すべての耳」という表現にはもうひとつ「身体部位には原則として所有形容詞を用いない」とする制限を破っているという点にも注目しなければならない。

つまり、*ses oreilles*という表現がポイントなわけで、「*oreilles*(耳)」という身体名称に対して「*ses*(彼の)」という所有形容詞が用いられて

いることが問題なのである。理由は、「直接的に過ぎて下品」ということである。教材に取り上げられるような、教育的に推奨されるフランス語の表現では、たとえば「汗が彼の背中を伝っていた」などとは言わない。そう言いたければ、「La sueur lui collait sur le dos(汗が彼において、その背中を浸していた)」と言わなければならない。すなわち、「son dos(彼の背中)」が使えないので、間接目的格の「lui」を用いて「汗が彼において…」と迂遠な表現にするのである。だからこそ、ここであえてそのような「タブー」を破ってまでも「de toutes ses oreilles」と表現した作家フロバールの思い入れを斟酌しなければならないところである。

ちなみに、モンゴル語訳ではここをamjsgaa xuraanと表現している。逐語訳すれば、「息を集めて」である。つまりは、「息を殺して」といったところであろう。また、日本語訳では「謹聴というかっこうで聞いた」としている。しかし、「謹聴」などと言われても、現代日本語ではめったに用いられるチャンスもないので、何のことだかピンとこない。せいぜい、「緊張して」聞いたのではないかと理解される程度だろう。

次に筆者の目を引いたのが、croiser les cuisses(足を組む)という表現である。les cuissesというフランス語は、なんと「太もも」という意味だから、逐語訳すると「腿を交叉させる」となってしまうのだ。ただし、この表現には先ほど、「フランス語では身体名称の前に所有形容詞を置くのは下品だから好まれない」と指摘したような問題はいっさいない。つまり、教科書にも載っているような、フランス語としてはごく普通の表現なのである。「太ももを交叉させる」が、下品でもなんでもない！ 文化とは、まことにもって理解に苦しむ面が多々あるということの1例になるのではないか。

この点で、中国から儒教思想の影響を長年にわたって受け続けてきた

わが日本では、さすがに「太ももを」などという表現こそは、あまりにも直接的に過ぎて下品であるという理由で敬遠される。だから、さらりと「足を組む」と訳しているのである。この点は、モンゴル語でも同様で、xölöö cj acj-となっている。ちなみに、「xöl」というのは漠然と足全体をさす言葉である。もしもフランス語を忠実に逐語訳するならば「gui(太もも)」という単語があるからだ。にもかかわらず、あえて「gui(太もも)」を選んではいない。

関連することだが、フランスでは「Langue de chat」という名前のチョコレートがある。逐語訳すると、「猫の舌」となる。もしも、日本人女性がこの本来の意味を知ったら、とたんに食欲が減退するに違いない。しかし、フランス人の若い女性は平気な顔をして「猫の舌」をペロペロと舐めまくっている。これが、異国文化の一面なのである！

この5.2に抜いた部分には、まだほかにも「頬杖をつく」の扱いか、5.1でも取り上げた「背景における線状性を描述する半過去(imparfait)」と「前景におけるヴィヴィッドなピンポイントの出来事を描述する単純過去(passé simple)」とのコントラストを十分に反映させた訳出をどのようにすべきか、など取り上げるべき課題は残されているが、紙数が残されていないので本稿では省略する。

6. 結語

以上、本稿においてははじめのほうの「目的」にも掲げたように、どのような点に心がけたら、現状より少しはマシな翻訳ができるのか、というポイントを模索することによって、暫定的に以下に示す3点を明らかにした。本稿の結語として、これらを列挙するとともに、現時点における対案を述べておく。

- (1)冒頭に掲げた、映画『騎兵隊』の例から明らかなように、娯楽を目的とする翻訳に際しては、徹底的な観客の視点に立ったサービスが求められる。したがって、そこでは正確さとか訳者の視点に立った理想論などを極力排除する努力が不可欠であろう。
- (2)アカデミー出版社で試みられた「超訳」などは、翻訳という作業の中でもっともっと旺盛に検討されてしかるべき、優れた方法なのではないか。
- (3)一言で「多言語交流」とか「異文化理解」などと言ってはばからない向きも多いが、実際のところどの程度までの理解や認識が求め得る限界なのかについては、定量化することがきわめて困難である。しかし、なんらかの形で将来的にはその困難な課題に立ち向かい、部分的にでも評定尺度化の実現へ向けての努力を怠るべきではないだろう。

☆

☆

☆

☆

コミュニケーション行動における真の「意思疎通」とは、互いに信頼関係を持ち、友愛の精神で築き上げた努力の賜物である「美しき誤解」にほかならない。

参照文献

城生佰太郎(1994)『「ことばの科学」雑学辞典』、日本実業出版社

引用文献・フィルムグラフィー

池上彰(2011)「福島原発で爆発」、朝日新聞、2011年3月25日朝刊、13版、15ページ

生島遼一訳(1971)『ボヴァリー夫人』、新潮文庫、新潮社

Flaubert, Gustave(1966)*Madame Bovary*, Garnier-flammarion, Paris,

Namsrai, J. 訳(1970) *Bobari Xatagtai*, Ulsiin xebleliin gazar, Ulaanbaatar

Ix surguuiliin gudamji, 1. Suxbaatariin neremjit xebleliin kombinat.

Ford, John(1959) *The Horse Soldiers*, United Artists.(ジョン・フォード

監督作品『騎兵隊』、ユナイテッド映画配給)